

# 決定、第33回写真の町東川賞

## 国内作家賞に本橋成一氏、海外作家賞はポーランドのアンナ・オルオーヴスカ氏

第33回写真の町東川賞の受賞作家が決定しました。国内作家賞は本橋成一氏(東京都)、海外作家賞はアンナ・オルオーヴスカ氏(ポーランド・ウルシャワ市)、新人作家賞に野村佐紀子氏(東京都)、特別作家賞に岡田敦氏(同)、飛弾野数右衛門賞には小関与四郎氏(千葉県旭市)がそれぞれ選ばれました。授賞式は7月29日午後2時から町農村環境改善センター、受賞作家作品展のテークカットは同日午後3時から町文化ギャラリー(8月30日まで開催)、受賞作家フォーラムは同月30日、同所で開きます。

第33回写真の町東川賞審査会は2月21日に東京都内で開催された。今年ノミネートされたのは国内作家賞48人、新人作家賞62人、特別作家賞22人、飛弾野数右衛門賞26人、海外作家賞21人。より多くの方々からノミネートしていただくとうと推薦者リストの拡充をすすめており、一昨年計106人、昨年計161人、今年計179人と増加している。8人全員の審査委員が、例年どおり午前中に集合、写真集やポートフォリオなど膨大な作品をじっくりと閲覧し、午後から審査に入った。

国内作家賞は、本橋成一氏に決定した。初期の未発表作「雄冬」「与論」から、代表作「炭鋺(ヤマ)」。「上野駅」「屠場(とほ)」。「藝能東西」「サーカス」「チェルノブイリ」、最新作の「アラヤシキ」までの9シリーズを編んだ『在り処』をはじめ、『築地魚河岸ひとの町』『上野駅の幕間そして、青函連絡船』といった作品が浮かび上がらせる市井の人々の姿

は、本橋氏の一貫した丹念な仕事を物語るものでもある。時を経てますます意義深いものとなるモノクロームの表現は、「写真史上、あるいは写真表現上、未来に意味を残すことのできる作品」という賞の規定にも、じつにふさわしい。

新人作家賞は、石川竜一、片山真理、菊池智子、野村佐紀子、林典子、吉野英理香の各氏が最終段階まで残り、野村佐紀子氏に決定した。

先行する『黒闇』シリーズ等のイメージを用いて、はじめてソラリゼーションで制作した『もうひとつの黒闇』は、写真集では黒い紙に黒のインクで印刷という試みがなされている。独自の身体表現と繊細なまなざしが注目されてきた野村氏は、国内作家賞の候補にあがっていたが、こうした実験性に満ちた刺激的な試みは、新人作家賞がより適しているのではないかとという判断から、今回の決定となった。

特別作家賞は、北海道稚内市生

まれ、札幌市出身の岡田敦氏に決定した。

学生時代に故郷の札幌近郊で撮影した友人や馬、風景などの被写体を、最新のデジタル技術と現在の感性で写真集にまとめた『1999』。2011年から撮影を続けている、根室の無人島であるユルリ島の風景や野生化した馬たちを追ったシリーズ「ユルリ島の野生馬」。記録性を越えた視点から照らし出された生命の在りようは、他のシリーズにも共通するものであり、出身地北海道での作品は、岡田氏の作品世界をいっそう豊かなものにしていく。

「長年にわたり地域の人・自然・文化などを撮り続け、地域に対する貢献が認められる者」を対象とする飛弾野数右衛門賞は、小関与四郎氏に決定した。

千葉県の旧栄村(現匝瑳市)に生まれ、自転車店に6年間半奉公の後、1967年に写真店を開き、経営をしながら写真を撮り続けてきた小関氏は、砂浜が延々と

続く遠浅の海での、オッペンと呼ばれる漁婦、フナガタと呼ばれる漁夫の過酷な労働をとらえた『九十九里浜』『成田国際空港』『国鉄・蒸気機関区の記録』『クジラ解体』など、そこに暮らす写真家でなければ撮れない光景をドキュメントし続けている。

海外作家賞は、対象国のポーランドから、アンナ・オルオーヴスカ氏が選ばれた。

政治的な大きな変動を経験し、映像表現の伝統に育まれたポーランドの作品は、とても多様な厚みと広がりがあり、楠本亜紀審査委員の調査に基づいた説明も踏まえたうえで審査に移った。オルオーヴスカ氏は若手作家を代表するひとり、見る者のイマジネーションを誘う作品は、国際的にも脚光を浴びている。最近では見えないもののテーマをさらに展開し、写真の可視性を問いかける作品も制作している。

今回の審査では、満場一致や大きな票差で決定された賞はなく、

